

濱嶋聡著

## 『アボリジニであること』

名古屋外国語大学出版会、二〇一七年

室 淳子



本書は、オーストラリアの先住民族アボリジニの文化と言葉をめぐる、その歴史と現状を主に教育現場でのフィールド調査を通して伝えている。日本ではあまり知られていないオーストラリアのもうひとつの先住民族トレス海峡諸島民についても触れている。

本書を手にしますとタイトルが良いと思った。アボリジニであること——シンブルでありながら、しばしば過去のものとして捉えられがちな先住民の存在を、そうではなく今この現在に生きる存在として訴えるように思えたからだ。表紙には、文化と言葉の喪失を伝えるフレーズが並ぶが、その中で一際大きく印刷されたこのタイトルが、多くの喪失にも関わらず今あるアボリジニの存在を力強く伝えるように思う。

ブックレットとして出版された本書は、初学者にも分かりやすく、数多くのエピソードや写真を含み、本文のすぐ下に設けられた脚注にも優れている。アボリジニの歴史や文化に関する基本の部分から、丁寧に解説してもらおう心地よさを覚えた。

何より魅力的なのは、オーストラリアのフィールドにおそらくはいつものバックパックを担いで何度も足を運んだ著者の姿が見えることだ。オーストラリアでの学生時代の友人との交友もさることながら、アボリジニのコミュニティにおいて人々と接する姿は私たちの知っている著者の姿と変わらない。車を無断借用して教頭先生に平謝りする姿も、著者のスパゲッティを自分の

ものように食べる「遠い親戚」に当惑する姿も、出会った人たちの話に聞き入り気持ちを寄せる姿も、著者の人となりやを彷彿とさせる。あらゆる歴史も政策も、個人の人生にいかにか反映されるかを知ってこそ真実味を増す。エピソードの中には、人々が著者を信頼してこそ語ってくれた話もあるに違いない。本書が綴るエピソードはそれ故に貴重である。北米においても日本においても、一方的な調査や収集、研究が長い間行われてきたことから、研究者に対する先住民側からの批判や不信の声は高い。先住民研究においては、とりわけ著者のような人とのつながりを重んじる姿勢が求められるだろう。また、日本の研究者として、アボリジニやトレス海峡諸島民と日本との関わりについて度々触れているのも興味深かった。

著者の専門領域であるアボリジニのバイリンガル教育に関しても、実際の教育現場から多くの状況が説明されるのが印象に残った。政策としてバイリンガル教育が採られていても、英語と優勢言語のみが教えられ、劣勢言語話者への配慮がない状況。バイリンガル教育が導入されるにあたってアボリジニ語がコミュニティの伝統的な言語と規定されたため、日常的にクリオール（クレオール）語を用いるコミュニティではプログラムが中止されてしまった例。教育相と教育現場との見解の食い違い。政権交代による混乱。教員不足。アボリジニの学習者が抱きがちに劣等感。本書の前半部では、西洋式教育とアボリジニの文化的価値観との齟齬や都市に住む先住民のアイデンティティについても触れられている。バイリンガル教育の導入と言えは聞こえは良いが、アボリジニコミュニティの多種多様な状況の中で多くの困難と粘り強い試みがあることを本書は教えてくれる。その中でも、アボリジニ語の教員養成機関の整備や、生活手段ともなるアボリジニ語普及のための YouTube やアプリの開発等、近年の新しい動きがあることに、一縷の望みを見ることができるよう思う。

本書は、二〇〇〇年のシドニー・オリンピックの話で始まり、一九六八年のメキシコ・オリンピックの後日談で閉じられている。本書はアイヌについても触れているが、二〇二〇年の東京オリンピックで日本がどのようにアイヌを発信するのか楽しみだ。